

令和元年度 山県市少年の主張大会 〈わたしの主張2019〉

6月8日、令和元年度山県市少年の主張大会が美山中央公民館で行われました。このうち、優秀賞に輝いた2人の生徒の作品を紹介します。

園生涯学習課 TEL 22-6845



食べるということ考える

美山中学校3年 池原 咲彩

「これ嫌い。」
「まずいから残そう。」
「もういらん。」
給食中次々に聞こえてくる言葉だ。自分が嫌いだったり、食べたくなかったりしたら平気で残す。いつもたくさんの給食が残菜ボールに入れられている。「おい、やめろて。」

「おもしろいからいいじゃん。」

勝手に牛乳をご飯にかけたり、他人の給食で遊んだりしている人もいる。

給食に限らず、食べることに対して、私たち日本人はこのままでよいのだろうか。お茶碗わんについているお米一粒も丁寧に食べる。そんな日本人の食べ物を大切にするという意識が、食料が豊富になった今、薄れてしまっているのではないだろうか。私はこの意識を変えていきたい。そして、食べることに

ついて改めて考え直すべきだと思う。実際、日本ではどれくらいのお食べ物が無駄になってしまっているのだろうか。調べてみると、日本では621万トンもの食料が廃棄されている。それは、国民一人がお茶碗一杯分を毎日捨てているのと同じことだという。どれだけ日本人が食べ物を無駄にしているのかと思い知った。廃棄されている中で半分は家庭からのものだという。衝撃的だった。

私も自分でおやつを買ってきて、冷蔵庫に入れたまま忘れてしまい、気づいたら腐っていた、なんてことがある。その時は「もったいないことをしたな。」と思い反省する。だがそれもつかの間。すぐに食べ物を捨てたという罪悪感は消え、数週間後に同じことをやっている。他にも、飲食店で注文しすぎてしまい、食べきれず残してしま

うこともある。持ち帰ることもできなかった。食べ物を大切にしない証拠だ。思い返すと、私はたくさんの食べ物を無駄にしていることが分かった。同時に、日常の行動、意識を見つめ直さなくてはいけないことに気づいた。

では、具体的に、どうしたらよいのだろうか。それは、食べ物大切に、という思いをもち、日常の中で少しでも変えていくことが必要だと考える。私は、食べ飽きてしまったご飯をリメイクしてみた。炊き込みご飯に酢を混ぜ、煮た油揚げにつめておいなりさんを作った。すると、弟や母、家族がおいしく食べてくれた。炊き込みご飯が捨てられてしまうのを防ぐことができ

今、日本には食べ物が豊富にあり、毎日当たり前のようにお腹一杯ご飯が食べられる。

では、世界ではどうなのか。世界に目を向けると、世界人口の9人に1人は飢えで苦しんでいる。まだ食べられるものを無駄にしている人がいる中で、食べ物がなくて困っている人がいる。そんなことがあってもいいのだろうか。私達が普段お腹一杯食べることができているのは、当たり前ではないのだ。毎回食事をする前には、「いただきます。」

しっかりと手を合わせて、心を込めて言う。そうすることで、食べることにへの感謝、食べ物大切さも見つめ直すことができるのではないだろうか。そして、日本だけでなく世界に目を向け、私達が今お腹一杯食べることができていることを当たり前でないとすることも忘れてはいけないと思った。

食べるということについて考えてみて、私は今まで食べ物を大切にしていなかったことに気づいた。食べられることに感謝して、毎回楽しくおいしく食事をしていきたい。少しでも捨てられる食べ物を減らすために、まず一人一人が一步を踏み出そう。見つめ直そう。



家族との関わり方

伊自良中学校 3年 中尾 円香

「反抗期とは何だろう。」真っ先に浮かんできたのは、「面倒くさい」というイメージです。最近の私は、反抗期だと思います。両親と話していても、兄と話していても、面倒くさくてイライラします。だから、家族と過ごす時間

は、以前よりも減っています。

私は、小学生の頃から、

「アドバイスにしても、すぐに否定する。」と母から言われています。そこが私の短所で、気を付けようと思っています。たしかに、私が優しいと感じる友達は、相談したときに、

「うん、そうだよね。」

と、まず、共感してくれています。共感って大切だなと思っていても、家族に対しては、ついつい反抗的になってしまいます。

私は、人と比べられることが一番嫌いで、友達と比べられると傷つきます。「Aちゃんは、よくお手伝いをするらしいよ。すごいよね。」と友達のことを言われると、「それで何？」と反抗的に思ってしまう。母は、私にできるようなってほしくて言っているのに。本当は、お手伝いをしていない私が悪くて、やりたくないことから逃げているだけなのに。でも、なぜか、自分が悪いと認めたくなくて無視をしたり、部屋にこもったりして反抗してしまいます。こういう時は、どんな家族が嫌いになり、「親なんていなくていいのに。」と考えてしまいます。母

からすると「生意気な娘」だと思います。

ところが、私の考えは、この春に大きく変わりました。それは、部活に関わる母とのやり取りからです。

私は、中学からバレーボールを始めましたが、ジュニアから経験している仲間のようにならず、レギュラーがなかなか取れず、悔しい気持ちを味わうことが多くありました。先輩の引退と同時に、他校との合同チームになり、試合では、どんな勝ち進み、県大会への出場も決まりました。しかし、私は後輩にも負けてレギュラーになれず、「応援なんかしたくない。」という思いと「勝ってよかった。」という思いが混乱していました。そんなときに回ってきた県大会という大舞台でのチャンス。それさえも生かし切れず、ミスをしてしまい、泣いてしまいました。そんなとき、「悔しいのは分かるよ。だけど、自分の感情を仲間に見せてチーム全体の雰囲気壊すのは違うと思うよ。」と、母は、私の気持ちに共感し、そして、アドバイスをくれました。自分のことでもいいだった私にとって、母の言葉は、「チームの一員である」とい

う自覚を取り戻させ、私と仲間との間にあった暗い空気を前向きな空気へと変えるものとなりました。「母は、私をよい方向へ導いてくれる大切な存在だ。」そう思えたとき、反抗ではなく、素直に受け止めることができました。

「家族の支えに助けられた」と実感しています。

みなさんは「反抗期」を理由に、家族との関わりを避けていませんか。些細なことでも喧嘩になってしまふのが家族。しかし、一番遠慮なく話ができて、支えてくれるのも家族。

私は、今年の母の日のプレゼントとして、父と兄と一緒に「リアル母の日」を行いました。ゴールデンウィーク中の三日間、日頃、母が行っている家事を分担して実践しました。毎日、掃除や洗濯などの家事を続けることはすぐく大変でしたが、母の気持ちが分かり、とてもよい経験となりました。

家族との関わり。反抗してしまうことも、まだまだありそうですが、家族が私を温かく支えてくれていることを忘れずに、私も家族を支えられるように過ごしていきます。